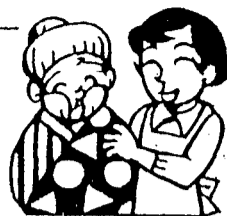


講演と話し合い 「こゝからの医療はどうなるのか」

— (1) ま、私達の訴、たえたいこと。 —



今日「中間報告」というオバケが医療界を徘徊しています。このオバケはいろいろな顔をしているため、その実態をよくつかむことができません。しかし、この催しの中でも、これがまかり通るのであればたいへんな事になる。参加者の共通の認識とすることができました。

診療所の真田婦長は、スライドを使いながら、日常の診療活動の中で直面する問題などについて報告しました。

「日野市には四百名ちかい、寝たきりの人がいます。診療所では二十名弱の患者を定期的往診を行っています。「中間報告」では在宅医療を重視していますが、実際にはお金なければ医療にかかれぬ状況が作られようとしてくるんです。私たち看護婦にとって外に出られない患者さんにより人間らしい生活してもらおうと思っっているのですが、実際の生活は大変です。床ずれの処置、看護婦にとっても大変な作業です。本当に痛い思いをして、繰

り返し消毒し薬をつけていきます。「看護婦が毎日、通えれば良いのですがそうもできません。家族の苦勞も大変です。家政婦やとうにしてまた民間の有料の看護婦に頼むというにしても大変な負担をしいられるんです。家庭にしても地域の医療機関にして充分に応えられる状況にはないわけです。こうしたなかで十分な治療もせず多くの人がベットから追い出されようとしています。医療を人権から考えていくならば許されないと思っています。」

「いま教育が あぶない」

丸木先生の講演

元診療所看護婦 木村川より

子育てをしながらつくづく思うことは、今の子供達はに本当大変だなぁという事です。勉強する内容も、以前は二ヶ月おぼえていたものを一ヶ月位でそれも早時期に教えられるます。又一年生から宿題が毎日あり、これも大変です。学校が終わってからの学習塾、四年生で八パーセントが通っているとも言われています。夜九時すぎに日野駅の近くで塾帰りの中学にたくさんいます。偏差値という名の塾で受験する学校が決められ納得できなくても従わさるえない状況があります。そのような形で選んで高校に入っても子供にとって

	土	金	木	水	火	月
夜間	鈴木	上田	増田	山田		
午後			増田		大石	
午前	佐々木 見島(木曜) 鈴木(木曜)	宮地 大石	佐々木 増田	佐々木 安河地	小林 (11:30) 小石	佐々木 (10:30) 大石

四月から五月にかけて日野市では憲法記念行事が行われています。「くらしに憲法を」は革新市政のスローガンです。その中で二十九日「こゝからの医療はどうなるのか」講演と話し合いが行われました。

決して学びやすい所でないことも多く一年間で十一万人の中退者がでているといわれています。本来なら子供自身がごこの高校に入り、何をしたいのか、どう生きたいのか、自分で自分なりに決め目標をめざしてがんばる中でこそやる気もでてくるのだとおもいます。「大人達の中に将来「金」「も」の「地位」を手にいれるために今学歴が必要だと誤った考えを持っている人が多い」と和光学園の丸木先生が講演の中でおっしゃっていました。教育は子供が将来大人になつて仕事をやる時のためにこそ生かされてくるものと思えます。子を思う親の気持ち

火曜日は私たちが楽しみにしている集会日です。立川第一相互病院から作業療法士の藤井先生、事務職員八戸さんの指導のもとに先週内の出来事の報告を始め、棒、顔の運動。片マヒ、ドレミ体操、童謡などを和気あいあいと体が汗ばむ状態で各自懸命に歌と体操です。昼食後は診療所の先生が看護婦さんと診察です。一人一人を丁寧に見てくれますので現在の体の状態が良く分か

り安心をします。いよいよ共作であるはり絵の準備作業にとりかかります。今度のはり絵は大作と聞いています。私たちには何ひとつ満足には出来ませんが、作業を分担して色紙を折り曲げたり切ったり、まらめてのりではつけたりどうにもならないところなどは、協同でと完成をめざして頑張っています。「皆さん区切りのよいところをやめましょう」と、先生の声で今日は終了です。「では、又来週も元氣よくあいましょう」と、お互いに声をかけてかえって行く。

88日野市 憲法記念行事

ひのたいしんぶん

発行 編集局 81-6175

日記

西奥原在住 横田 富春

健康だより



「ザウルス」がとりもった縁
 小林 南雄
 たことをヒントにしました。
 現在、クラブのメンバーは、四名、平均年齢六十二才ですが皆若々しく和気あいの内に毎月の会合をつづけております。この有意義な活動の輪を更にひろげるべく会員獲得に努力しております。
 ちなみにザウルスは、なりは小さく種類なのですがキャンキャンとびあがるのが得意でよく人にとびつきます。顔は、丁度メスのライオンのような顔をしています。
 どうぞ よろしく。

「ザウルス」とは、我が家の孫が付けた子犬の名前です。この子犬をくださった心やさしいおばさん 小林 礼子さんを孫達は「ザウルス」おばさんと呼んでいます。おばさんのおかげで健生会の活動を知り昨年十二月協力会に入会いたしました。班は、グリーン・クラブとなづけました。名のいわれは、会のメンバーが「小林」の姓で、若々しい緑のように健康にの意をこめて。また私が小さい頃より育った西洋館をグリーン・ハウスと呼んでい



新所長 佐々木 弘子先生



今から十三年前、大学の研修を終え大阪市の西淀区にある民医連の柏花診療所に勤務したのが、私と「診療所」との初めての出会いでした。西淀区という地区は、小工場、繁華街、住宅などが雑然と混在したところ、で大気汚染はすすみ公害の認定地区に指定されていきました。診療所のスタッフは、大学の先輩の藤森先生を所長に私を加えた二人の医師、薬剤士さん、検査技師さん、栄養士さん、ケース・ワーカー、三人の看護婦さん、三人の事務の方と、診療所としてはかなり充実したメンバーでした。そこには大病院の医療には見られないような「診療所」の医療があり、驚きとまどいの日々でした。「ザルプロ」という注射をしてほしいという患者さん、二十ミリリットルのブドウ糖液にビタミン剤を入れた注射を毎日してほしいと通う患者さん、藤森先生の健康についてのわかりやすいおはな

し余、高血圧糖尿病などの療食の会食会、看護婦さんケースワーカー方と一緒にまわった家庭訪問など、その事が走馬灯のように思い出されます。時は卒業後二年めの駆け出しの医者で、この強烈な体験をどう受け止めていいのかからず一年間の診療所勤務がすぎさってしまいました。医師になって十四年目に度は所長として診療所にどっぴりつかろとしていました。以前勤務していた西淀区と全く異なり非常に環境のよい日野市といふ文化的な街ですが、やはりここにも、現の細分化専門化しますます人間の体を細くわけてたくさん専門家達で診ていことしている大病院指向型の医療の方向に「対している人達の要求がうずまいておりす。私も常々人間の体を細かくわけた結果そのつなぎ目どうしていくのだろうか」と悩んでお

診療所と私



わたしが日野台診療所にかかるようになったのは、昭和五十七年ぐらいいからです。主人が病気にかかりちかくのお医者さんが亡くなられたことからどこにかかろうかと迷っているときにやはり程久保に住んでおられた今井さんに「医療の事なら気軽に相談ください」とすすめる方がいるというので今井さん、主人と私で相談にまいりました。そこでお願いしたのがいまも診療所におられる大石先生でした。おかげさまで立川第二相互病院に入院することになりました。病院の廊下で主人をまわっているときふと目にとまったのが病院建設のポスターでした。

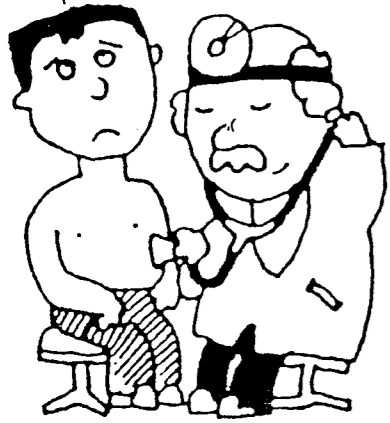
毎日病院と家とを往き来する生活の中で大石先生、大石不二雄先生に本当に良くみていただき親しみのある病院だなぁとしみじみと感じていましたのですこしでもおもしろい貯金いたしました。今でも大石先生に助けていただいた事を忘れることができません。そのとき窓口で協力会の事をしり近所のかたにもおしらせして、十七名くらいだったとおもいます、入会いたしました。日野台診療所には伊藤先生、中川先生がいらっしゃいました。その時、運転してきていただいたのが職員の方木さんです。箱木さんふたりでわたしのうちにまいりまして近所の方達と健康についての懇談会をひらきました。「心臓がこういう様にドクドクドクン うつんですと心臓の模型をもってきていただいた説明してくださりました。このように分かりやすく説明していただいたのは初めてです。私たちも健康のことは、きかかりでしたから、みなさんに本当によくしていただいていた程久保にも診療所をたてようということになりましたが実現はしませんでした。診療所とおつきあいがふかくなっていたのはそのような経過からでした。

昭和二十五年 佐々木 弘子
 沖繩に生まれる
 今年六月日野診療所所長就任



6月24日(金)
 協力会日野支部総会
 午後2:00~
 日野台四丁目
 地区センター
 ちのいのぞい? みょうから

健生会 日野診療所 医師 体制表



日野診療所 81-6175

受付時間

午前 9時～12時

午後 2時～4時

夜間 5時半～7時半

		月	火	水	木	金	土
午 前	外 来	佐々木 (10:30~)	小林 (~11:30)	佐々木 安河地	佐々木 増田	宮地 大石	佐々木 児島(才4週) 鈴木(才2週)
	往 診				福 富		
午 後	外 来		大石		増田		
	往 診	高橋 住友			佐々木		
夜 間	外 来	山 田		滝 田		上 田	